

## ☆11月23日国民の医薬シンポ☆

80名超の参加者で、朝～夕方まで濃厚な内容の会でした。

午前中は、立命館大学の吉村良一氏による「イレッサ訴訟における企業と国の責任」の講演でした。「製造物責任法」に照らし合わせても、医薬品であるイレッサは、その安全な使用において欠陥であったと解説してくれました。

東京地裁判決での、緊急安全性情報後は死亡数が減っているというのであれば、添付文書第1版においては、その（致死的是間質性肺炎）危険性を読み取るには十分でなかったと言える（医師等の1～2人が読み誤ったというのであればともかく、多くの医師等が読み誤ったと考えられる）ということが、この法律において責任を問われたのだと、少しわかった気がしました。

新薬は情報が現場に本当に無く、こちらからの情報請求には一切応えず、一方で「夢の新薬」旋風を暴走させた…このこと事態が「絶対あやしい」と、こと新薬に関しては判断することの重要性を実感しました。また、イレッサの使用に関わり、不幸にも副作用死を面前にした医者、薬剤師は「とにかく情報がなかった」では許されない思いを背負っていかなければ…とも感じました。

『薬害イレッサ訴訟の公正判決を求める要請署名』の  
取り組みにご協力ください！

☆署名用紙はこちらからでもダウンロードできます☆

<http://www.gaiki.net/yakugai/gef/signature.html>

（外苑企画商事＞薬害根絶＞薬害イレッサ書庫 内）



## ☆午後-がんの薬物療法について考える-☆

京大名誉教授の福島医師から Regulatory Science-問われる人間性-の観点から、シンポジウムでは-癌患者、薬剤師、緩和ケアの看護師、弁護士の立場から報告を聞きました。

福島医師は開口一番「全ては知力の劣化、傲慢と無知から生じている」とイレッサ承認、人の命を軽視する情勢を痛烈に批判しました。

福島医師は激走\*イリノテカン以来、世界でも注目すべき全例調査という薬害防止の策をイレッサでは国が自ら行使しなかった。やるべきことをやらないから（薬害防止システムを無視）起きたのだ。\*歴史から学ばぬものに未来はない-過去の教訓を全く活かしていない。\*哲学の無い科学・技術は凶器だ…など記憶に残る内容でした。自らのあり方を考え直すのに大事な事ばかりだと思いました。「結局は全て人間性」…医療の真理でしょうね。

シンポジウムでは、看護師からは副作用が強くケモを断念した患者さんから「かえって体調は良い。癌が進むのは怖いけど苦しいまま生きるよりはよかったかも」の声が紹介され、治療の目的は「患者さんが安らかに生きること」に繋がないと…と、しみじみ感じました。

また、薬剤師の「高額療養費控除だってきつい。高いのに効かないなんて許せない。副作用のひどい治療にしがみついている患者さんはいっぱいいる」という発言に共感を禁じ得ませんでした。

